

「西郷隆盛敬天愛人の会」発足25周年 直系4代目当主・吉太郎さん迎え講演会

護国考の「海舟と一致、無血開城へ」

【東京】明治維新の立役者の一人、西郷隆盛は鹿児島県の地元では今でも、敬意を示して「南洲翁」、あるいは親しみを込めて「西郷どん」と呼ばれている。隆盛の生き方、信条を表す「敬天愛人」の精神に感銘し、広く後生に伝えることを目的として設立された「西郷隆盛敬天愛人の会」（平山徳廣会長）が今年、25周年を迎えた。これを記念して今月2日、西郷隆盛直系の4代目当主の西郷吉太郎さんを迎えて講演会を開催した。

吉太郎さんは、曾祖父隆盛、祖父東太郎、父吉之助の嫡男。1947年生まれ、現在は、医療法人社団赤坂記念小児科クリニックのディレクター。エッセイ「西郷隆盛の秘話を語る西郷吉太郎さん」

が1884年、新政府によりドイツへの留学が許された。約10年後に帰国し、陸軍少尉になったが、52歳で流行り風邪で亡くなった。資料が少なく、私自身、府によるドイツへの留学が許された。約10年後に帰国し、陸軍少尉になったが、52歳で流行り風邪で亡くなった。資料が少なく、私自身、

が1884年、新政府によりドイツへの留学が許された。約10年後に帰国し、陸軍少尉になったが、52歳で流行り風邪で亡くなった。資料が少なく、私自身、

が1884年、新政府によりドイツへの留学が許された。約10年後に帰国し、陸軍少尉になったが、52歳で流行り風邪で亡くなった。資料が少なく、私自身、

が1884年、新政府によりドイツへの留学が許された。約10年後に帰国し、陸軍少尉になったが、52歳で流行り風邪で亡くなった。資料が少なく、私自身、

が1884年、新政府によりドイツへの留学が許された。約10年後に帰国し、陸軍少尉になったが、52歳で流行り風邪で亡くなった。資料が少なく、私自身、



上野にある銅像 糸子夫人気に入らず

捕虜收容所の初代所長としてドイツ人の捕虜を管理します。ドイツ語が堪能ですから、当初から捕虜の扱いはせず、愛情を注いだと聞きました。収容所ではドイツ人によってハムやソーセージが生まれました、オーケストラも紹介されました。祖父の人物を知ることができて、曾祖父から4代目の私までの人生が一気通貫してつながったのです。とても感激したことを覚えています。そして、この日のテーマである西郷隆盛について話が及んだ。隆盛の思想を表すエピソードとして、

父から聞いたというエピソードでは、上野にある銅像に及んだ。隆盛の妻糸子夫人は気に入っていませんでした。その理由として「一人前になるまでは緋の着物ではなく、きちんと正装していた。また、こんな怖い目はない」と証していました。ちなみに上野の銅像の所有者が特定されていないため、まったく管理がされていない現状だという。吉太郎さんは「皆さんのご意見をうかがいたい」と協力を依頼した。糸子夫人との関係で言えばある日、夫人の作った味噌汁を「おいしい、おいしい」と隆盛が顔をほころばせたので、弟の従道が飲んだところ、味噌が入っていませんでした。1年のうちほとんど家にいない隆盛は、家事や子育て一切を切り盛りしていた。それが無血開城につながった話。父から聞いたというエピソードでは、上野にある銅像に及んだ。隆盛の妻糸子夫人は気に入っていませんでした。その理由として「一人前になるまでは緋の着物ではなく、きちんと正装していた。また、こんな怖い目はない」と証していました。ちなみに上野の銅像の所有者が特定されていないため、まったく管理がされていない現状だという。吉太郎さんは「皆さんのご意見をうかがいたい」と協力を依頼した。糸子夫人との関係で言えばある日、夫人の作った味噌汁を「おいしい、おいしい」と隆盛が顔をほころばせたので、弟の従道が飲んだところ、味噌が入っていませんでした。1年のうちほとんど家にいない隆盛は、家事や子育て一切を切り盛りしていた。それが無血開城につながった話。

海舟のひ孫と吉太郎さん 固い握手を交わす

講演を聴いた参加者の一人は改めて、南洲翁の偉大さを実感したと同時に、ほほえましいエピソードも聞けて良かった。平川会長は「南洲翁の生き方や社会の平和を求める敬天愛人の教えを、今後は若い世代にも広めてほしい」と話した。同会は、鹿児島県西郷家の墓所清掃などを実施している。

記事・写真 奄美新聞社提供

敬天愛人の教え

天を敬い人を愛し、天を識り己を盡くし、人を咎めず。我が誠の足りざるを尋ねべし。即ち天とは宇宙を含め天地自然の道であり、人の道でもある。故に天地自然を敬うは天意である。



講演会の終了後、4代目同士で固い握手を交わす吉太郎さんと勝康さん